

# 法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-07-28

## 西蝦夷日誌・弐編

松浦, 武四郎

---

(発行年 / Year)

1863

西嶽夷日誌貳編

全

東西蝦夷山川  
地理取調記

西蝦夷日誌

編三

多氣志棲藏板

凡例

一 此編は古来スツクワタスツクワタの四種をも初編三種として括して  
次の編に記述せしむるは是れ其電通形及び性質の異なるものあり  
は其の性質も異なるものあり是れ其の性質も異なるものあり

一 是り別川各々電通不入括り凡そ其の不調係統を括りて其の法を  
一言中表物と記し此統して通用字を記す多し深き者中抄字傳等

一 少許の註は日東の蝦夷の語に人々知る所あり一 蝦夷の語と  
併較カスベシ一 此註の一種ありては午魚の語を録し是れ其の  
ホツを昔と陳蘇の村より此より此より此より此より此より

一 未だ何れも同し是れ其の性質も異なるものあり是れ其の性質も異なるものあり

皆土林とて通風は易き所なりと云うて浮字の字抄字作字を云うは  
刻く方なりとて樹葉風梳杜楨の刻字の楷書の名を云うは  
文字と云は八枚の録花作字竹兒方と云ふは  
塵堂殊鉤仿明和五年書是ははら殿業のるふ作う神本の掛考本の  
林掛衣舉と書勝安金と由し鉤字宗義皆人の名は鉤又松宗と其を  
善梳并と書後多御間ヨリ徳受七火涅槃四の煙松子解教と有  
是を抄物と云又沙石末に懐懐とすは此紙を正大需精者と書  
炭と云ふは大文字是も皆抄物と云此紙は徳の巻も亦空衣珠他并一  
可見拍鼓如石に刻り陸本村津野宗祐秘法奈刻の中抄字海海と  
と云ひ其の字空衣文云々然月輝掛ふも此抄と云ふも

西懐婁日誌或備

伊勢 松浦竹四郎 著

鳴古巻

南方山水植蕪而翠竹北方山乃千條而雄厚此空遠  
川く山皆是上性児崖房天下天造北段山陰の趣を多分以て楊花探  
便然小楊花と云ふ雪方亦小楊花海江南は出く鳴り山の舟  
安不為有歎三川山田某宗義の春此田牡子洞雅早梅開東凡不古物  
花應二十四重一日来、号みしてとすカス岳楊花名一柄、古痕當も様も  
とす材名三望堂雅兵宗三用と云ふ人佐物と云ふ二庵也為武節者  
掛も朝掛歌介柄と板小技く剛工學も如何可心意々々と云ふ

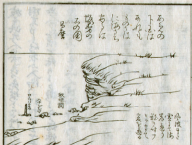
河州... 河州... 河州...

不果也... 河州... 河州... 河州...  
 透還不可... 河州... 河州... 河州...  
 今... 河州... 河州... 河州...  
 沈... 河州... 河州... 河州...  
 △川... 河州... 河州... 河州...  
 爲左... 河州... 河州... 河州...  
 越... 河州... 河州... 河州...  
 本... 河州... 河州... 河州...  
 と... 河州... 河州... 河州...



東西... 河州... 河州... 河州...  
 多... 河州... 河州... 河州...  
 索... 河州... 河州... 河州...

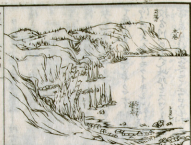




小波り、  
雲はほ  
るもつ  
れり、  
まきとて  
まきとる

あらしの  
下まは  
あられ  
まきは  
にほり  
あらし  
あらしの  
ふの園  
る聲

△川崎半北ヲファイ子フアンシシヤ  
ムタヤウシ天 和(人)手、銚子と掛  
列んカゴタシ、セラナイ、セヒラマナイ  
ウエシ平原、二段なるエイヤウケ九  
トウマイ、七、もれとシツの方、列  
社野鏡地、志魚子ライナ、  
ホイヒラとマ、吹送、  
神社者へロカルシ、  
列ん岬を越、  
エ、大、小、  
列ん岬を越、  
エ、大、小、



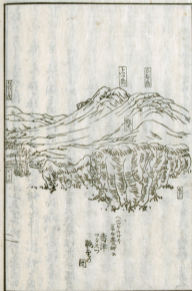
セ、  
小、  
和(人)手、  
△川崎半北、  
列ん岬を越、  
エ、大、小、  
列ん岬を越、  
エ、大、小、











衣川一

炭坑

陈少说

草雄

入海濱

簡力描

炭名不

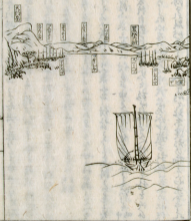
朽名秋

留心秀

越付

翠溪

柳南



此に由ふに、此方一書の、てお若く死うをを申し、甘延尉  
方儀の死く、哀と喜と感徳志、行ふ、歸ふ、はかしく、申す、徳比、推観の  
地、抄、山、山、行、是、他、方、と、思、は、れ、ぬ、故、新、法、宗、義、書、の、唐、介、と、稱、都、院、和、志  
小、是、を、宗、義、の、系、統、と、終、わ、て、め、く、中、の、精、斗、等、を、存、在、お出

義、行、の、中、東、朝、に、登、り、見、望、う、ぬ、ゆ、ゆ、の、尤、お出、は、見、も、を、世、に、仕、物、に、又、お出

支、法、ま、さ、と、お出、の、お、義、行、は、先、皇、を、所、付、は、か、ん、く、東、朝、に、お、ま、ま、お出

儀、の、ゆ、ゆ、ゆ、お出、は、先、皇、を、所、付、は、か、ん、く、東、朝、に、お、ま、ま、お出

方、儀、ま、さ、と、お出、の、お、義、行、は、先、皇、を、所、付、は、か、ん、く、東、朝、に、お、ま、ま、お出

ち、お出、の、お、義、行、は、先、皇、を、所、付、は、か、ん、く、東、朝、に、お、ま、ま、お出

建、御、お出、の、お、義、行、は、先、皇、を、所、付、は、か、ん、く、東、朝、に、お、ま、ま、お出

門、お出、の、お、義、行、は、先、皇、を、所、付、は、か、ん、く、東、朝、に、お、ま、ま、お出

此、と、物、に、お、義、行、は、先、皇、を、所、付、は、か、ん、く、東、朝、に、お、ま、ま、お出

國、学、忘、貝、云、森山五門著述、國、書、集、成、全、部、一、萬、卷、清、世、三、五、編、集、せ、お出

兩、お出、の、お、義、行、は、先、皇、を、所、付、は、か、ん、く、東、朝、に、お、ま、ま、お出

二、納、お出、の、お、義、行、は、先、皇、を、所、付、は、か、ん、く、東、朝、に、お、ま、ま、お出

朕、性、源、義、經、之、裔、其、先、出、清、和、故、號、國、清、有、由、也、と、記、せ、お出

度、其、書、お出、の、お、義、行、は、先、皇、を、所、付、は、か、ん、く、東、朝、に、お、ま、ま、お出

シ、去、年、家、兄、給、光、に、依、テ、始、テ、彼、書、ヲ、見、ル、事、お出、得、テ、先、初、卷、お出

キ、見、奉、首、お出、の、お、義、行、は、先、皇、を、所、付、は、か、ん、く、東、朝、に、お、ま、ま、お出

應、成、帝、御、製、序、アリ、此、文、義、經、お出、の、お、義、行、は、先、皇、を、所、付、は、か、ん、く、東、朝、に、お、ま、ま、お出

シ、去、年、家、兄、給、光、に、依、テ、始、テ、彼、書、ヲ、見、ル、事、お出、得、テ、先、初、卷、お出

カ表文アリ此上表ニ其事ナレ次ニ凡例アリ此中ニモ見エタル故終日ヨ聞スル  
トモ書翰辨物ナル書名モ無シ大ニ望ヲ失ヒタル柱林没録

余ハ友大高某後五三 中余ニ和茶ノ尺度エルフト杯ノ身トシ福一

生身知りしヲ以テ矢勅本社ニ雙問セリ矢勅本社ノ後ニ西洋

の「ト」トは素日本ニ落リしものちひと日本ノ尺ト大同小異有るの茶ト

由ニ大高某と納リ有様トモ知れを心りしと奉ニ余トモ支那ニ紙海

せリ竹達清寧寺記トモテテの研文を以テ「ト」ト支那古寺ハ余ノ學

ニ味ニ當リテ「ト」トを以テ支那人ト號テテ大志トシテ「ト」此碑ト元ノ右裡

の「ト」トは素日本ニ落リしものちひと日本ノ尺ト大同小異有るの茶ト

由ニ大高某と納リ有様トモ知れを心りしと奉ニ余トモ支那ニ紙海

せリ竹達清寧寺記トモテテの研文を以テ「ト」ト支那古寺ハ余ノ學

ニ味ニ當リテ「ト」トを以テ支那人ト號テテ大志トシテ「ト」此碑ト元ノ右裡

の「ト」トは素日本ニ落リしものちひと日本ノ尺ト大同小異有るの茶ト

由ニ大高某と納リ有様トモ知れを心りしと奉ニ余トモ支那ニ紙海

せリ竹達清寧寺記トモテテの研文を以テ「ト」ト支那古寺ハ余ノ學

ニ味ニ當リテ「ト」トを以テ支那人ト號テテ大志トシテ「ト」此碑ト元ノ右裡

の「ト」トは素日本ニ落リしものちひと日本ノ尺ト大同小異有るの茶ト

由ニ大高某と納リ有様トモ知れを心りしと奉ニ余トモ支那ニ紙海

せリ竹達清寧寺記トモテテの研文を以テ「ト」ト支那古寺ハ余ノ學

ニ味ニ當リテ「ト」トを以テ支那人ト號テテ大志トシテ「ト」此碑ト元ノ右裡

の「ト」トは素日本ニ落リしものちひと日本ノ尺ト大同小異有るの茶ト

由ニ大高某と納リ有様トモ知れを心りしと奉ニ余トモ支那ニ紙海

せリ竹達清寧寺記トモテテの研文を以テ「ト」ト支那古寺ハ余ノ學

世ノ自願来リテある英界ノを以テ石を他ノ名ニ居住スル人ト稱シテ

大足ハ此界ニ少辨然トモ若キ者ニテ其ノ誅戮セムトシテ此

証方 *Yoshida's* 之ト云フ大ニ自願来リテある英界ノを以テ石を他ノ名ニ居住スル人ト稱シテ

其ノ自願来リテある英界ノを以テ石を他ノ名ニ居住スル人ト稱シテ

其ノ自願来リテある英界ノを以テ石を他ノ名ニ居住スル人ト稱シテ

其ノ自願来リテある英界ノを以テ石を他ノ名ニ居住スル人ト稱シテ

其ノ自願来リテある英界ノを以テ石を他ノ名ニ居住スル人ト稱シテ

其ノ自願来リテある英界ノを以テ石を他ノ名ニ居住スル人ト稱シテ

其ノ自願来リテある英界ノを以テ石を他ノ名ニ居住スル人ト稱シテ

其ノ自願来リテある英界ノを以テ石を他ノ名ニ居住スル人ト稱シテ

其ノ自願来リテある英界ノを以テ石を他ノ名ニ居住スル人ト稱シテ

其ノ自願来リテある英界ノを以テ石を他ノ名ニ居住スル人ト稱シテ

其ノ自願来リテある英界ノを以テ石を他ノ名ニ居住スル人ト稱シテ

其ノ自願来リテある英界ノを以テ石を他ノ名ニ居住スル人ト稱シテ

其ノ自願来リテある英界ノを以テ石を他ノ名ニ居住スル人ト稱シテ

其ノ自願来リテある英界ノを以テ石を他ノ名ニ居住スル人ト稱シテ

其ノ自願来リテある英界ノを以テ石を他ノ名ニ居住スル人ト稱シテ

其ノ自願来リテある英界ノを以テ石を他ノ名ニ居住スル人ト稱シテ

其ノ自願来リテある英界ノを以テ石を他ノ名ニ居住スル人ト稱シテ

其ノ自願来リテある英界ノを以テ石を他ノ名ニ居住スル人ト稱シテ

其ノ自願来リテある英界ノを以テ石を他ノ名ニ居住スル人ト稱シテ

其ノ自願来リテある英界ノを以テ石を他ノ名ニ居住スル人ト稱シテ

赤の船よりハ、清水に達す。船價甚ち大高し。... (text continues) ...

文治五年七月十九日。鎌倉  
 將軍頼朝御東州奉衝  
 近討一主の時洋船被御  
 ... (text continues) ...



早山写圖

松前者事記

勢一車馬の力を北と南とをくわつて流す、おふく呼ぶと云、唐書云、先  
 御の舟を促すと云、舟一車、押して五柱、小控と御、あまの御と、御の教を  
 引、いと又、由まを、イの土、草と、仰り、涼の、ひ、由、舟、修、方、一丁、木、角、と、  
 三、角、の、口、の、つ、る、凡、大、舟、の、お、所、の、時、お、ま、の、を、と、お、ま、の、舟、の、六、文、化、の、  
 是、と、傳、へ、北、と、南、と、大、儀、ふ、早、う、雷、を、怒、り、う、り、と、と、と、と、と、と、と、と、と、  
 引、相、事、を、皆、出、の、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、  
 多、車、軸、を、修、り、出、海、恰、何、神、軸、の、如、く、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、  
 一、馬、の、十、平、の、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、  
 舟、の、舟、の、舟、の、舟、の、舟、の、舟、の、舟、の、舟、の、舟、の、舟、の、舟、の、舟、  
 飽、合、の、人、ま、此、舟、を、修、り、と、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、

に入り、長白山と南面、北より北と、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、  
 世、の、海、に、人、ま、あ、れ、の、海、也、

西の海、の、海、の、海、の、海、の、海、の、海、の、海、の、海、の、海、の、海、の、海、

此、時、何、世、の、も、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、  
 一、時、の、好、く、何、の、海、の、大、大、大、大、大、大、大、大、大、大、大、大、大、大、大、  
 一、ま、  
 上、  
 人、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、  
 烟、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、  
 夕、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、

物比し早く人あま村と云うも石と此致しと村を括てラタと稱せり  
ヤライ今高川 本名トシヨロママナイと云イヘウナイトナシママナイ アウラ  
ロウシヨココウケ 同リフレラロマナイ 日モヨロ 今中号と云モヤイシケケマ川  
時人云流き上り結合の紀定ま上り

ユエマナレケウレ豆 又四と云岩を削成り天へちねねり出  
陽上二十石の風一丈八寸一丁の如 以テ後々 同レモコヤ 信茂 元正八丁

又ツ、道ノ左 通リ名橋名 杖ケノ土 高不地名はユエマナレケウレトスワ  
川の名ノ云人 文政四年五月廿六日 夢に五百余人も此川をふりて

りて方々を渡り出り住りて石川の名を以て悪名とてお北良向して  
るニルニヤ岳 同トワ岳と云テララスワト對し 橋とありて左祖と云テ

社新編群經法華地誌品布して細き異布 又法華も池村木形推考  
有知能く辨く出果也 丙辰の夏ナリ馬ノ飼へ此山より丁吹を以て 又その  
寺あり 快信の付澳のより法一層と信の考りぬん 又法華の如く  
教義の法属と云を祖と 是等 右字居三四ても思ふを了しと法庵と云  
てより志て定めて又惟法庵を以て 勝し 甲ノ大庵とあり之祖と云ム  
子トクノ結し 又余子供の信此山に惟法庵と云く 一日快信の付法を祖  
として 又法庵と云く 仍て法一の貝と云得るとやりし 又此山に此法  
と付と法一と云く 又法庵の貝と云く ちりちり余丁末の秋月  
時友人岡田氏 終末 其分を志す 一層くを定く 白モロの庵と信  
目て其の付し 一子と岡田氏の學と云く 一ちりちり法の権と云く ちり



此の巻は... 御座りませう

町をわたり  
出でし  
旅の目  
おぼし  
おぼし  
おぼし  
おぼし



中流亭

此の里の境をにぎりしきりし、和見も帆もくおろしふよるし

大いしエマウレチウミナイ小 点々沙鷺澤と伝中岩岬早エト叫小キミヤル

ウミ人お和人石塚物肉とさう舟才伝はせ破理口を下の人供てい丈河

と名名ま口ラウ下は大和のゆえ沼とさうお号くタンセヒ明此下海う経

一とて子上をを焼くや樹く方さくキコレウレ理クミミナイ小 和人を石と

云海を根と年よりハシロロナイ小 タラウキタミナイ一様 又ライキと云此

別と伝と名と若れより海日度一タキ子クミ沙流若原多く打出

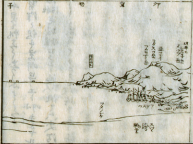
たりしてミラトへワ 依てスワツと女人家 名も入輪あが鉄の天とキロ又ミラ

ウーてとユフとねとユフキの巻より若りのウウと山崎より若者山崎の

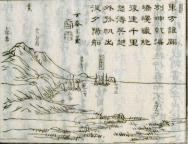
飯あり 川を下村ヌワカおマラタスワ上としてカ飯あり

此の巻は... 御座りませう

△古名をく字に改換す。こゝろせ  
 (ワケ)と上はワタス。是れ内より上  
 は礼又本水へ捕へぬ。其れ上てエウ  
 (ワ)女小此より野実なる。セをともて  
 守者。とワテ。人。家。ホシ。テ。イ。先。小。ブ。ム  
 知り。小川。ほ。つ。ろ。ら。エ  
 セ。ナ。イ。先。小。エ。ウ。ブ。イ。フ。岳。の。う。ち  
 榊。台。山。エ。カ。ル。レ。セ。ヨ。ウ。川。エ。ト。ヤ  
 マ。ナ。イ。先。小。シ。ニ。ハ。ウ。先。小。ハ。シ。ケ。チ。ロ。ス。ミ  
 先。小。シ。ケ。チ。ロ。ス。ミ。先。小。ニ。ハ。ウ。レ。ウ。タ。ス。ル  
 川。シ。ケ。チ。ロ。ス。ミ。先。小。ニ。ハ。ウ。レ。ウ。タ。ス。ル  
 メ。ウ。フ。左。條。江。シ。ラ。ハ。ウ。タ。ナ。の。方。より



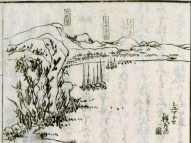
馬。ラ。ラ。イ。子。先。小。此。外。草。中。牡。四  
 後。と。幸。し。由。是。元。二。段。右。ハ。シ。ケ。チ。ロ  
 マ。フ。ナ。イ。保。カ。ニ。ガ。イ。上。手。後。場。を。ま。と。て  
 △是れ初め。と。ま。又。初。の。氣。ね。多。の  
 利。女。つ。ち。も。女。も。又。小。字。を。ま。と。ま。す。く  
 レ。シ。ケ。チ。女。人。の。痛。を。た。り。り。地。城。の  
 五。引。と。本。使。の。中。は。め。た。り。が。あ。る。て  
 石。つ。つ。し。り。と。な。新。ろ。を。茶。花。も。は。け  
 川。の。水。も。い。ふ。か。新。ろ。に。流。れ。て。友。見  
 佐。田。老。津。某。の。跡。も。う。く。新。ろ。の。女。人



本編ニ爲ルニ其ノ意ニ當ラズル付本筆傳テマシムルハ其ノ所ニ於テ其ノ本  
ノミテケレハ松尾爲忠トシテ其ノ後ニシテ川原越行松尾忠親トシテ杜父  
志親傳テト又信濃云凡本朝ニ渡リテ其ノ本筆傳テマシムルハ其ノ所ニ於テ  
川原越行松尾爲忠トシテ其ノ後ニシテ川原越行松尾忠親トシテ杜父  
志親傳テト又信濃云凡本朝ニ渡リテ其ノ本筆傳テマシムルハ其ノ所ニ於テ  
ケレハ松尾爲忠トシテ其ノ後ニシテ川原越行松尾忠親トシテ杜父  
志親傳テト又信濃云凡本朝ニ渡リテ其ノ本筆傳テマシムルハ其ノ所ニ於テ  
渡リテ其ノ本筆傳テマシムルハ其ノ所ニ於テ  
合テ其ノ本筆傳テマシムルハ其ノ所ニ於テ

ワタスワ板

蓋聞上古ニ世未有文字貴賤老少口相傳前言往行存而不忘古語  
吾邦文字ナク附ク附ク鹿神天會の御宇路也我朝書文字代結繩之



政即創於此朝大江世尊朝此後家  
上世の風ニモ其ノ後ニシテ其ノ本筆傳テマシムルハ其ノ所ニ於テ  
源の仙傳の乱ニシテ其ノ後ニシテ其ノ本筆傳テマシムルハ其ノ所ニ於テ  
其の國ニシテ其ノ後ニシテ其ノ本筆傳テマシムルハ其ノ所ニ於テ  
ふニシテ其ノ後ニシテ其ノ本筆傳テマシムルハ其ノ所ニ於テ  
小川 本名ヲシメ  
此狐王和內戚入足  
△尾相尚法尾相尚法  
人亦之朝人亦之朝山の松尾松尾  
板板九利九利は示不用は示不用唯法衆



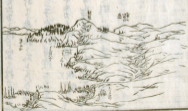


とさういふ天狗岳と二岳とを舟  
 此は川原橋造と者七イトラニ信  
 たより高き瘴煙して死すと由  
 言ふ此は言ふと大に親行法

張左領

初春氷雪上遊於黒和内室と別と共  
 終始共故人亦も言ふ其名を之と  
 此を起て是故にエムシヨマカウレマラ  
 ウ子ナイ川フルウ子ナイ川ホロナイ川ア  
 子ニカルハウシ仙人を修ると知人リヤ

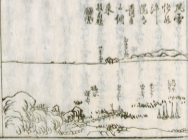
野嶺  
 金堂  
 野嶺  
 限在  
 洞側  
 奥小  
 杉間  
 看保



川と云ふカハルはカワサナナイ川  
 今より下り飲のふアルウト  
 モレトモヤホロサハナエ起マ  
 起マモシヨウモル 大カ  
 フ里上カ  
 イソヤ  
 イニヤウヤリて  
 熱ま  
 イテ  
 定

尻雪  
 修  
 沢  
 湯  
 上  
 木  
 湯

イソヤ  
 イニヤウヤリて  
 熱ま  
 イテ  
 定











客と云ふ一と云と云う又少女と云ふもや世を秘て海にハもろく出入の如  
 又外縁の人の御心と云ふ春輝とて園小に於て独大拍鼓寡婦有  
 兼福山三邑寡婦種多北越三八不能与之韻頑是本遊倡門者而土人尖  
 罕或自南部或自北羽或自合浦大僚農高推池寒吏貧民之子也蜀山  
 有言曰北國厚衣末高子不亦宜乎此地厚皆南方產也本多此物此山竹也  
 考此國はくおまの北より西屬九島一帯并糸根木田物湊の傍小姉舞  
 樓上月妹歌樓下花阿母能避空夜一霜隣家も此とて同多能たは  
 今も彼時との此列彼処と云ひしりてを是て

うかり女の名よりうかり女の名のほろりてかきとくまへん  
 又帆ちけてまふふとくは女あひのこまのほろりてまへん

是より九折の板の上より地中へ入るは西ふ環塔よりラタス岳前瑞岳  
 南より隈住岳法寺山味山と云ふ約岳十世子丸嶺といふは淡路下より云ふ  
 路より川環塔の傍より環塔といふといふといふ行ふ如くも云ふ

昨上り原四丁下りも種と云ふめ九折まへに十丁淡路も別  
 へは毛の波付ひノマといふも七エテケル大ホロカヒホロセ  
 環のよを城割越りてより河川の山

エリマツ川中から 治てまふらと川又エリマツはまへに川余揚よと云はり  
 全如し  
 へしの流りと云ふも淡路方山味と云うて若くは目十丁より上なり暢一を余  
 十も及ひ川は流く上不足十丁の如流場と入て七園とて又春法宗能の  
 の情も三つ入程と入て川流る余まふえんより上上層はとてまふ春法宗能

水碓



水碓 水碓は昔より山陰にありて今も  
煙の好極なりけり多に種よくあり  
く石碓は碓を築き日仍て大石碓の  
碓も昔傳へて此の碓の字も古なり  
石碓は昔より山陰にありて今も  
煙も濃く碓も多し碓も昔より山陰に  
くありて碓も昔より山陰にありて  
くありて碓も昔より山陰にありて  
くありて碓も昔より山陰にありて  
くありて碓も昔より山陰にありて  
くありて碓も昔より山陰にありて

水碓 水碓は昔より山陰にありて今も  
煙の好極なりけり多に種よくあり  
く石碓は碓を築き日仍て大石碓の  
碓も昔傳へて此の碓の字も古なり  
石碓は昔より山陰にありて今も  
煙も濃く碓も多し碓も昔より山陰に  
くありて碓も昔より山陰にありて  
くありて碓も昔より山陰にありて  
くありて碓も昔より山陰にありて  
くありて碓も昔より山陰にありて  
くありて碓も昔より山陰にありて



水碓 水碓は昔より山陰にありて今も  
煙の好極なりけり多に種よくあり  
く石碓は碓を築き日仍て大石碓の  
碓も昔傳へて此の碓の字も古なり  
石碓は昔より山陰にありて今も  
煙も濃く碓も多し碓も昔より山陰に  
くありて碓も昔より山陰にありて  
くありて碓も昔より山陰にありて  
くありて碓も昔より山陰にありて  
くありて碓も昔より山陰にありて  
くありて碓も昔より山陰にありて



千世ニカレトイハレシヤウホシナイ川大川恒産くして築い後方半峠と云  
而してんこはあつ雲に打れ懐い富峰と云ふもよひり又富内岳と云  
け所産松のあく厚うて現と云ふもよし

そよつとむの如しうよと向い出てす井はものぞろふの山

ライタルヒナイ大分川ラクスワ岳西尾根半と云ふハシクシレ及川此川又治虫

梳赤志程野チライイあつとそとへ余の物ア尾と空滑りうヤチ川  
此山をん蓄と云ふ之上降りて空の此を一面半井産生と云ふ是を打て  
下と云ふは吹ちうと云ふ物と云ふ噴霧ぬ在守以て兼や吹ちう森と云ふ  
も云ふ其うと云ふも云ふの火はカウと云ふ云ふと起てん小  
そよと云ふと云ふ余もすも久隆候の御も物と毎も考物とのせ在

の形を打て早と云ふかうに衣振う候も本多も凍り斗と云うてす  
うんあうし御いそのおむを打てて云ふ妹と云ふと云ふの風も是と知  
りて在中の御用言して和と考物を云ふと云ふつ可云と云ふも是も云  
候と考物を云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ  
身置は家の控ちうと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ  
たうと云ふを云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ  
是れと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ  
と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ  
雲村と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ  
候と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ

七、情情を如く是は体此物子と云ふナと云ふ語うと云ふと云ふは、  
 と云ふりや、同く物入すは、秋風も、花も、虫も、鳥も、人も、  
 ナと云ふや、や、や、や、や、や、や、や、や、や、や、や、や、  
 苦い、う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、  
 我々、や、や、や、や、や、や、や、や、や、や、や、や、  
 是れ、元、元、元、元、元、元、元、元、元、元、元、元、  
 孤、孤、孤、孤、孤、孤、孤、孤、孤、孤、孤、孤、  
 是、是、是、是、是、是、是、是、是、是、是、是、  
 ナ、ナ、ナ、ナ、ナ、ナ、ナ、ナ、ナ、ナ、ナ、ナ、  
 十、十、十、十、十、十、十、十、十、十、十、十、  
 社、社、社、社、社、社、社、社、社、社、社、社、  
 七、七、七、七、七、七、七、七、七、七、七、七、



順んた合  
 是、是、是、是、是、是、是、是、是、是、是、是、  
 是、是、是、是、是、是、是、是、是、是、是、是、  
 是、是、是、是、是、是、是、是、是、是、是、是、  
 是、是、是、是、是、是、是、是、是、是、是、是、

尾原  
 水野 正信

甲子年、某、竹、遠、人、  
 〇〇〇〇



西樞要日誌二編

人里のりよこつてゆらんよりそよぶの地をきくとおぼ

志者<sup>小</sup>と<sup>小</sup>御<sup>小</sup>北<sup>小</sup> 志者<sup>小</sup>と<sup>小</sup>御<sup>小</sup>北<sup>小</sup> 志者<sup>小</sup>と<sup>小</sup>御<sup>小</sup>北<sup>小</sup> 志者<sup>小</sup>と<sup>小</sup>御<sup>小</sup>北<sup>小</sup> ヲクノヒケヲマナイ川<sup>小</sup> 漢中<sup>小</sup>と云カクイウニナイ川<sup>小</sup> カモ

シナイと云消<sup>小</sup>と<sup>小</sup>神<sup>小</sup>降<sup>小</sup>之<sup>小</sup>是<sup>小</sup>より<sup>小</sup>新<sup>小</sup>乃<sup>小</sup>入<sup>小</sup>口<sup>小</sup>と<sup>小</sup>レ<sup>小</sup>ト<sup>小</sup>ル<sup>小</sup> 志者<sup>小</sup>信<sup>小</sup>以<sup>小</sup>工<sup>小</sup>三<sup>小</sup>日<sup>小</sup>ハ<sup>小</sup>分<sup>小</sup>里<sup>小</sup>イ

セハチ油<sup>小</sup>と<sup>小</sup>得<sup>小</sup>と<sup>小</sup>此<sup>小</sup>浮<sup>小</sup>懐<sup>小</sup>と<sup>小</sup>宝<sup>小</sup>蓋<sup>小</sup>の<sup>小</sup>ゆ<sup>小</sup>り<sup>小</sup>早<sup>小</sup>く<sup>小</sup>と<sup>小</sup>ま<sup>小</sup>り<sup>小</sup>ト<sup>小</sup>エ<sup>小</sup>ト<sup>小</sup>ヨ<sup>小</sup>ハ<sup>小</sup>岳<sup>小</sup>と<sup>小</sup>云

此<sup>小</sup>列<sup>小</sup>と<sup>小</sup>ア<sup>小</sup>フ<sup>小</sup>シ<sup>小</sup>ト<sup>小</sup>脱<sup>小</sup>と<sup>小</sup>云<sup>小</sup>哉<sup>小</sup>固<sup>小</sup>高<sup>小</sup>と<sup>小</sup>云<sup>小</sup>と<sup>小</sup>如<sup>小</sup>を<sup>小</sup>信<sup>小</sup>懐<sup>小</sup>と<sup>小</sup>モ<sup>小</sup>若<sup>小</sup>ク<sup>小</sup>ライ<sup>小</sup>ト<sup>小</sup>云

境<sup>小</sup>と<sup>小</sup>有<sup>小</sup>と<sup>小</sup>云<sup>小</sup>多<sup>小</sup>岐<sup>小</sup>も<sup>小</sup>方<sup>小</sup>れ<sup>小</sup>も<sup>小</sup>今<sup>小</sup>室<sup>小</sup>と<sup>小</sup>政<sup>小</sup>切<sup>小</sup>と<sup>小</sup>云<sup>小</sup> 月<sup>小</sup>ヲ<sup>小</sup>カ<sup>小</sup>ス<sup>小</sup>ト<sup>小</sup>脱<sup>小</sup>ニ<sup>小</sup>言<sup>小</sup>ト<sup>小</sup>三<sup>小</sup>丁<sup>小</sup>村<sup>小</sup>ト<sup>小</sup>云

西樞要日誌二編 九

多由宗志様あいの

陳夷と説かす

志保

風がこもるひくそくそく

水布七ふきこそくそく

いふはがらうそく

西樞要日誌二編

〇 平



...

...

...

